

八十三歳にしてなお

同窓会

楽しく生き甲斐を求めて

金祝燦燦会に集う我ら熟年世代

桜島

西村 雅男

はるけき煙

野にみてり

けんせつの歌

萌ゆる芽の

育む自治に

新しき

いのちははずむ

われら県民

人は和したり

豊けきこの土

わかき鹿児島

豊けきこの土

わかき鹿児島



この歌詞は幼き頃僕を育ててくれた鹿児島県の「県民の歌」です。今でも歌われているのかしら・・・と懐かしく思いながら、時折口ずさんでいます。

住んでいたのは鹿児島市で、冬は桜島の右(南側)から、夏は左(北側)から太陽が昇る。山あり、川あり、海あり、野あり、谷あり、台風もある。天然自然の中でおおらかに、受験勉強もなく、お手伝いも忘れて遊びほうけた幸せな時代でした。本当は戦後の貧しい時代で、食べるものもなく、着るものもなく、まさに薩摩芋で生き延びた年代でした。若さの限りをつぎ込んだ仕事も終わり、嘗ての労働運動も、過激な闘争も夢・幻のようにしか思えない今日この頃です。

私の卒業した上智大学も今は男女共学で、しかも男性より女性の方が優秀だとかで、学生数の六割を女子学生が占めているらしい。高校も男子校であった我が身としては、まぶしく華やかな母校となっています。社会で活躍している同窓生を見ても女性の素晴らしい貢献が目につきますし、同窓会活動でもさりげなくリーダーシップを発揮している人が多く、久しぶりに東京に帰ってきた先輩としての僕は彼女らの、表にたったり、陰になったりしながらの応援を得て、標題にしましたように生き甲斐のある楽しい同窓会活動の仲間に入れてもらっています。

今年の桜の季節はコロナのお蔭で散々な目に遭いましたが、それは人間の問題であって、桜の花自体は例年通り素晴らしい花を咲かせていました。我が家の東に桜島とは比較になりませんが小山があって何本かの桜を毎年リビングから眺めていました。今年も外出することなく楽しめました。

桜といえば東京では上野や千鳥ヶ淵が昔から名所でしたが最近では中央線の市ヶ谷から四谷・赤坂などのお堀端の土手に桜並木ができています。四谷に母校がある僕としては

この桜並木の誕生の経緯に特別の感慨を覚えるのです。



学生時代の、真田堀に面した土手は松並木でした。堀は既に埋め立てられていて、大学の運動場となっていました。一年後輩になるのですが、一九六〇年の卒業生に空手部の主将をやっていた人がいました。卒業記念に何か残したいと考えて、土手に桜を植えることを思いついたのです。

まだ貧しい時代でした。五九年の年末のことです。手元のお金では足りなかつたので衣類を質にいれ、空手部の後輩何人かと新宿まで行き、部員数と同じ六〇本の桜の苗木

を買い、担いで四谷まで、歩いて帰ってきたのだそうです。



せつかく植えた桜が折られたりしたこともあったそうですが、聖イグナチオ教会からホテルニューオータニまで桜並木ができることになりました。五年後には当時の老舗料亭・福田家でも百本を追加してくれました。それで今の真田堀の桜並木にまで成長したのです。

上智大学では卒業生に金祝・銀祝・銅祝というお祝いをしてくれるという行事があります。卒業生には好評で最近ルビー祝が追加されました。

僕の金祝は二〇〇九年ですが、一〇年の金祝のメンバー達が、大学からのお祝いをいただくだけではなく、この機会を活かして何か社会貢献できることをやろうじゃないかと思いついたのです。そこで出てきたアイデアが五〇年前の同期生が行った桜の植樹でした。それに見合う事とし

て誕生させたのが「金祝燦燦会」です。

金祝というのは卒業五〇周年を記念して大学がお祝いをしてくれるということです。金が最後になり、ルビー・銀・銅などもそれぞれの周年でお祝いしてもらえます。お祝い状には『世の光、地の塩として・・』とラテン語で書かれていたかと覚えています。

一番若い会員でも七十二歳です。一般的な定年後でも二〇年は経っています。圧倒的に年金生活者ですので、今更功名を求めたり利害を絡める人はいません。目的は「金祝世代の仲間との交流・親睦を図ると共に母校上智大学に貢献すること」と定められました。英語名は「Sophia Goldenagers' Club」です。Sophiaというのは上智大学の英語名 Sophia University からきていて、同窓会も普段はソフィア会と称しています。

上智大の教育モットーに「Men and Women for Others, with Others」というのがあります。また上智では留学生が多く学んでいます。そこでその「Others」を「外国人留学生」と読み替えて手助けしていくことにしました。留学生と共にこれからの人生を輝いていこうと考えたのです。

日本語スピーチコンテスト

ソフィア会では、今年は流れてしまいましたでしたが、五月に「All Sophian's Festival」というお祭りを開催しています。

その行事の一つとして燦燦会では、留学生による日本語でのスピーチコンテストを始めました。昨年は「日本文化に接して」をテーマに八人が登場しました。

一位はシンガポールからの留学生で「令和」を例にとり、日本語の美しさと奥深さについて話しました。

二位はイタリアからでノルウェーの森の東京、私の東京」と題して、大好きな村上春樹の小説通りに主人公が通った

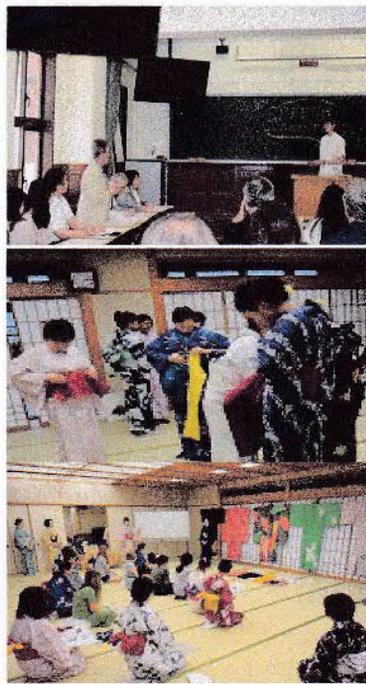


道を歩いた経験を話しました。

三位は中国からで日本と中国の高校生活の違いを語り、それぞれの良さを話しました。

審査員特別賞があり、上智としては初めて受け入れたという東チモールからの留学生でした。信号のない国なのだそう、池袋駅で「音がうるさくて、大きなものが自分に近づいて来た」と初めて電車を見た時の経験から話し始めました。東京の毎日は驚きの連続のようでした。

副賞として七月に行われた「上智浴衣デー」に併せて浴衣セットが贈られました。千代田区のボランティアの方々



お国自慢日本語スピーチコンテスト

上智大学には外国からの留学生向けの寮が二カ所あり、その一つが上智大学祖師谷国際交流会館です。

そのすぐ門前の公園で、地元の町内会による「トライアングルフェスタ」というお祭りが十一月に開催されます。それに協賛して燦燦会では留学生によるお国自慢スピーチコンテストを行っていました。二〇一五年からはソフィア会の国際委員会の主催となりました。その年の報告です。

お祭りへの協賛ですので、午前中はソフィア会で用意した寄席があります。会館二階に俄か作りの高座で四名のソフィアン師匠が熱演しましてお笑いをちようだいします。

午後になりますと燦燦会協力の「お国自慢・」です。フランス、中国、トルコ、タイ、アメリカからの留学生五人が登場しました。

優勝はタイのサイバットさん。微笑みの国タイについて、国王への熱き想いとともに語ってくれました。

二位はシカゴについて語ってくれたルークさん。

三位は湖南省の熱き人達について語ってくれた中国の秦

さんでした。

五人には参加賞として歌舞伎への招待もいたしました。

何よりも素晴らしかったのは、それぞれの母国に対する誇りと熱意が間近に感じられたことでした。

そしてソフィアンだけではなく町内会の皆さん、小学生からご隠居さんまで、発表者を暖かく見守って、盛り上げてくださいました。この催しは昨年从他大学を含めてのザビエル杯争奪コンテストとなり、今後の発展が楽しみです。



二〇一三年の話です。僅かばかりの賞金や参加賞に箱根フリーパスがありました。留学生達はそれを出し合って箱根旅行に出かけました。噴火の心配がまだない頃で、良い思い出になったことでしょう。間近に見た富士山をどう感じたか・・・。

金祝奨励金の贈呈

一国一名で八カ国の留学生を支援

原資は一口千円募金で・・・



「For Others, with Others」を留学生と決めたところで、最も緊急な手助けはやはり留学経費です。と、いつて年金族にそんな余裕があるはずありません。そこで会員から一口千円での募金をすることにしました。

まずは一人五万円で五人、計二十五万円からスタートです。大学で授与していた奨学金制度がありました。そこでそれに乗せする形にしましたので使い勝手も良かったようです。

毎年新しい会員が入りますし、

募金額も順調に伸びてきました。そこで大学の制度では対象の学生がアジアに限られていたこともあり、現在は世界から一国一名で八カ国に拡大しています。一口千円募金での供与ということで僅かな金額ですが、学生達にもこちらの想いが届いていて大切に使用してもらえているようです。

人選は大学に依頼しています。昨年の実績はドイツがたまたま二名になりましたが、ウガンダ、ナイジェリア、カメルーン、アメリカ、ブラジル、ガーナからの留学生でした。上智には八一カ国、一七六〇名もの留学生がおり、今回アフリカの四名が含まれたことは嬉しいことでした。

授与式には理事長・学長・学生局長などにも立ち会ってもらい、手渡ししています。振り込みではできない日本人との直接の交流を重視したいのです。せっかく日本を選んでくれたことへの感謝とその成果の実ることを願っています。会話は英語が主となります。できるだけ日本語にするようにしているのですが、こちらの関係者も会話には達人な人が多いのでつい・・・、後ろで聞いている人達には「マイクがない」ので何を話しているのか分からないままです。正式には「金祝燦燦会勉学奨励金」と称しています。

「夏祭り 心に咲くや 恋花火」

日本語俳句・英語俳句

(中国広州・男子留学生)

俳句に親しむ留学生たち

上智大学に来る外国人留学生は、彼らの専門の勉強に励むと同時に、日本語はもちろん、茶道、華道、俳句などの日本文化にも大きな関心を寄せています。中でも、道具も作法もいらない俳句は入りやすく、また日本の四季を感じる事ができるものとして、興味を持ってくれたようです。燦燦会では俳句コンテストを、当初は春夏秋冬、年四回催していました。夏休みや冬休みもあつて年四回は忙しすぎる事から最近春夏秋冬の二回の開催としています。その度に多くの学生達が参加し、大変人気のあるイベントとなりました。

「良くは分からないが身近な日本文化に触れてみたい。見よう見まねで、わずか三行の詩を作ることで、今までと

は違った、ものを観る感性が働き、自然と接触するなどを通して、自分の考えを表現する」ことを理解できていったのでしよう。そうして賞に選ばれれば、誇りにも思い、また選ばれなければ、次への挑戦をする気持ちを持てるようになつてきたようです。

そこでこれまでに入選した作品をいくつか紹介します。

日本語俳句

夏祭り痛む草履も宝物 (スペイン)

黑夜空花火のドカン咲き誇る (ドイツ)

雪の夜終電を降り歩く音 (中国)

初雪や窓辺に憩う子らの笑み (ロシア)

迷わずに舞い落ちてくる山桜 (中国)

夏の空ふと見上げると切なくて (アメリカ)

君の眼は私に落ちた天の川 (イタリア)

天狼を包む澄み切る夜空かな (中国)

川底や泳ぐ木漏れ日夏の風 (中国)

舞い降りてまつげにふわり雪化粧 (日本)

お日様も寄せ鍋恋し早帰り (中国)

英語俳句

留学生による英語俳句を紹介します。それに日本語訳をつけました。これは燦々会の会員である江澤健二さんが表彰式の座興として始めたものですが、その出来が素晴らしく、学内はもとより学外の専門家からも高い評価が寄せられています。英語俳句と共に楽しんでください。

Sweet sunny days Blue beach waters come ashore

Seashells lay on sand

貝殻を渚に運ぶ夏の波 (カメルーン)

White blanket underneath Seeds waiting for spring

雪の下春を待っている種と種 (ヴェトナム)

A snowflake A simple touch Gone forever

雪片は軽く触れては消えてゆく (米国)

Do not sorrow for fallen sakura, ajisai is flowering

散る桜惜しめばやがて咲く紫陽花 (中国)

Soft pink petals Swirl with the wind

Transient beauty

花びらは傷つきやすし風の渦 (ヴェトナム)

When it comes to summer Please wear a yukata

And go to asakusa

夏なれば浴衣召しませ浅草へ (中国)

Blue waves of water Ripple over golden sand

A gleaming, pink shell

青い波黄金色の砂桜貝 (ヴェトナム)

The trees change their dress To attend an autumn ball

Where leaves swirl and dance

紅葉着て木々の赴く舞踏会 (米国)

Frozen parking lot The black cat curled

Over a still-warm engine

底冷えや猫の丸まるボンネット (日本)

On baer branches Fluffed up sparrows asleep still,

A dawn in winter

裸木にやぐら雀の寝る朝 (インドネシア)

My lost blankets slowly descending from the sky

First snow of winter

探した毛布空から初雪だ (スペイン)

表彰式では結果発表の時に本人に作品を読み上げてもらいます。そこで審査の先生方からの講評があります。

入選者に日本人もいますが、帰国子女だったり、二重国籍の方達です。応募者には、国際教養学部(EIA)といって、全て英語だけで授業が行われている学部 of 学生が多いです。

英語俳句の選考は元学長や EIA の教授の先生方です。日本語俳句はソフィア俳句会の有志にお願いしています。

表彰式での先生方のお話をいくつかご紹介します。

A教授 俳句はこの数年でグローバルなものとなりました。イギリス、スエーデン・インドなどでも行われています。とても多くの応募があり、選ぶのに苦労しました。

B教授 短い詩である俳句。句の中にあるフィージングを感じ、人類の持つ感性を活かして続けてください。

俳句は歌を通じて日本文化に会うということ。上智大でその歌による交流ができることは大切なことです。

C教授 俳句を作るにはまずイメージ・シヨンを膨らませ、美しい風物を見ること、その意味をつかむことです。私は英語の俳句を見ってきましたが、その中で美しい対比をするためには日本と外国という二つの目を持

つことが必要です。皆さんの健闘は素晴らしい。

Dさん 皆さんの言葉から春・夏の違い、季節を自分のものとしていることを感じました。日本に来たからには自分の体験として俳句を是非とも身につけてほしい。俳句を通してもっと日本を知ってください。

Eさん みかんを食べて掘炬燵で食べたことを思い出しました。日本の大根やほうれん草なども食べて、季節感を感じてください。ゆずの香りは素晴らしいものですが、トゲがあつたりします。俳句を作ることで五感を磨き、ますます上手になってください。



紀尾井亭で 茶の湯を楽しむ会

茶道部の協力でお点前を経験

老舗料亭・福田家が変身して今は上智大学の紀尾井亭
となっています。その本格的な茶室で現役の学生さん

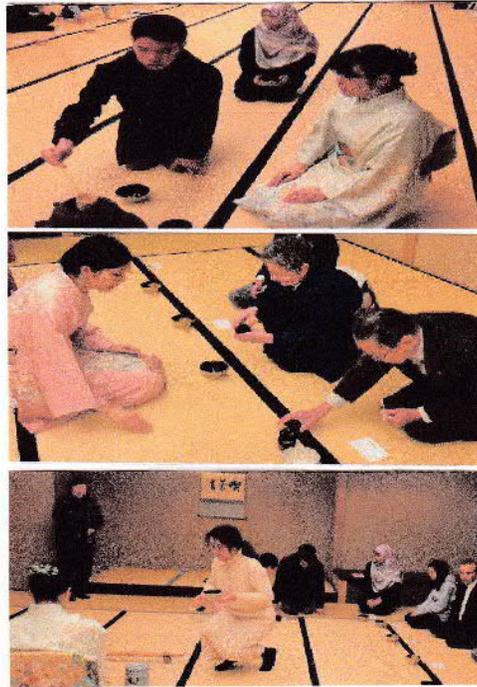
達によって留学生を正客とした
お点前が披露されました。

この日は留学生が四名、燦燦会
からは一〇名が参加しました。

茶道部の皆さん総出で、先輩ま
でが駆けつけてくれたので、和気
藹々とした、こころのこもった茶
席となりました。

まず茶の湯は決してむずかし
いものではありません。お湯を沸
かしてお茶を点て、神仏に供え、
お客様に差し上げ、そして自分も

いただく。こころを清らかにし、お互いを敬い、仲良く
しましょうといった説明だったかとは筆者の推測です。



全員所定の場所に座ります。お茶をいただく作法を教
わります。茶碗をまわして一服。続いて座敷の中央で皆
さんの注目の中でお茶を点てる作法を教わります。改め
て自分の席に戻り、茶笥をいそがしく動かし、また茶碗
をまわして一服。お菓子は最初の一服の時だけでおしま
い。ここでも一人ひとり、しっかり指導がありました。



茶席が始まるまでの時間を活用して留学生には着物を着てもらいました。元老舗料亭の和室です。お茶席です。記念写真も撮って皆さん大喜びでした。

こころを尽くしてのご接待でした。茶道部の皆さんには感謝です。これからもよろしくお願い申し上げます。



ザビエル杯

スピーチコンテスト

上智大で 開催！

燦燦会からソフィア会の国際委員会に主催者が移行したスピーチコンテストが昨年一二月、初めて他の大学にも呼びかけられて、「ザビエル杯」として実施されました。

参加したのはキリスト教系の青山学院大、聖心女子大、独協大、立教大、上智大でした。出場した留学生は一四名。テーマは「日本で経験した最も印象的なこと」。

日本では当たり前のことも留学生には新鮮に映り、一見ささやかな出来事が異文化の理解や母国を見直すきっかけになりました。故郷を離れて、喜び、悩み、考えたことを伝えるスピーチは、いずれも胸を打ちました。



優勝カップを手にしたのは
劉 聰慧さん（中国・青山学院大）でした。

ラグビー元日本代表の大野均さんが大野賞としてサイン入りジャージーを贈呈。

「日本代表チームには多くの外国出身選手がいて、あの活躍がありました。皆さんも母国と日本をつないでください」と話し、審査委員長の白石和子さんも「一心に日本語を学んだ経験はきっと財産になります」と激励しました。



復興 東日本大震災

ソフィア森の長城

プロジェクト

一九六三年卒の金祝委員会が開かれていたある日、同期生である細川元総理がガレキを活用する大きな堤防を造るという話が飛び込んできました。二万人余りの犠牲者と甚大な被害をもたらした大震災でしたが、二年半を経過したその時点でもまだ震災ガレキは膨大に残されたままでした。地元で生育する照葉樹、低木、亜高木、高木層からなる森は災害に強いという大学教授・宮脇昭氏に細川氏が同調

し、「瓦礫を活かす森の長城プロジェクト」（現・鎮守の森プロジェクト）を立ち上げたのでした。

青森県から福島県までの太平洋岸三〇〇kmに、巾約二〇m、高さ約三mの盛土を造り、シイ・タブ・カシといったその土地本来の木を植えるのです。そういつた「ふるさと木・森」が大津波に強いことが証明されていたのでした。

早速二年一月には仙台（写真左 宮城・岩沼市で）

平野でのどんぐり拾いに参加し、一三年の二月には有志による「ソフィア森の長城プロジェクト」を設立したのです。その後は植樹祭に参加したり、「五〇〇円募金」で苗を育てる費用に寄付したりしています。きっかけは六三年卒の金祝でしたが、細川氏個人というより、プロジェクトを応援することになりました。（写真上 岩手・山田町で）



金祝燦燦会 濱口吉右衛門会長

ソフィアンズ顕彰で表彰

上智大学の同窓会・ソフィア会は大学の創立一〇〇周年を機に、会に顕著な貢献のあった会員を顕彰することにしました。三回目にあたる昨年一〇月、燦燦会の濱口吉右衛門氏が顕彰に値するとして表彰されました。濱口会長は「この賞は金祝燦燦会にいただいたと私は信じています」と感謝の言葉を述べていました。

今回の受賞者の特徴は一三名の内六名が燦燦会の会員だった事です。それに賞を受けた方のソフィア会の会長・副会長も会員なのです。受賞者を代表して挨拶されたニューヨークソフィア会の篠崎晃氏は

「私は『ひとり燦燦会として』としてどのような貢献ができるか考えを巡らせた結果、上智からの留学生に限らず、ニューヨークに移り住むソフィアンとその家族が自立できるまで一対一で支援する Big Brother, Big Sister の仕組みと同時に、各地ソフィア会相互の交流を深めるグローバル・ソフィアン・ファミリー運動を提唱し実行して参りました。引き続きご支援をお願いいたします」と話されました。

「経覧会会長」「森の長城プロジェクト」の会長であった柳本信一郎氏も「母校はハンデを負った私を立ち直らせ、世界的な企業で働く勇氣と実力を与えてくれました。最後に会長の濱口吉右衛門さんの受賞にも心よりお祝い申し上げます」と加えられました。燦燦会としても皆様にお祝いを申し上げ、また温かいご支援に感謝申し上げます。



金祝燦燦会 新しい発展を目指して

世代交代してもこころはつなぐ

これまでの燦々会の事業は手探りから始まりました。まずは自分たちには何ができるのかということでした。ご紹介してきた諸事業は、思いついた時点で経費の捻出を考え、事業への協力を関係者にお願ひし、がむしゃらに走り出して成し遂げられた？ようなものです。

それができたのはひとえに学内の皆様からの温かい支援があったからでした。燦燦会のこころである「for Others, with Others」を理解していただけていたのです。まさにカトリックの上智でなければあり得ないことでした。上智大とその同窓会の精神と、全てが目に見える範囲にあるという規模の大きさが、燦燦会の事業にちょうどマッチしていたといえるでしょう。

スタート時の会員はほぼ八〇名、今年度の新入会員はコロナ騒ぎのお蔭でまだいませんが、電子投票で行われた総会での定足数は三七三名でした。これからは女性会員の活躍が期待できます。そういったことを含めて、記念すべき一〇周年は創立時の五倍を越す会員で迎えることになりそうです。

今年の総会の眼目は事業内容・執行体制・予算の規模等が見えてきたところでの「若い人たち」への世代交代です。創立世代の業績が素晴らしかっただけに新体制としては荷が重いかもかもしれませんが、仲間は格段に増えています。新しい仲間と共に、創意工夫で目的のよりよい達成に邁進してくださることを期待しています。

このレポートは燦燦会はもとより、ソフィア会などの発表資料をフルにつかって作成しました。また関係の皆様からも多くの資料を提供していただきました。ここにご協力くださった皆様には厚く御礼申し上げます。

燦燦会は成熟した社会の良き一例となれるのではないのでしょうか。先立つ友には淋しい想いをしていますが、事業の続くことにはありがたいことと感謝しています。

